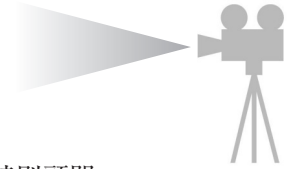




## 映画とその時代 ⑨



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

1980年、経済界視察団の一員として、当時まだ強盛だった旧ソ連の各地を歴訪した。ソ連側の通訳は、バレリーナのような細身の若い女性だったが、その見事な日本語に感じ入った。措辞も抑揚も間然する所が無く、しかも活き活きと弾むように歯切れがいい。

一度も日本の土を踏んだことがないという彼女が、どうして日本語に興味を抱いたのか、どのようにマスターしたのか。その質問に意外な答えが返って来た。そのきっかけは(映画)であり、決定版は『男はつらいよ』シリーズだったという。

子供の頃から見知らぬ異国の風物に憧れ、モスクワ国際映画祭などでさまざまな外国映画を追いかけるうちに、数本の日本映画に出会った。そして初めて聴く日本語のまるで小鳥の囀りのようなふしぎな響きと繊細なトーンにシビれたという。そして難関のモスクワ大学日本語科に進み、教材とした数多くの映画のなかで、当時日本で人気沸騰中の『男はつらいよ』シリーズを知った。祭りや縁日で寅さんがまくし立てる売り口上。その七五調のメリハリとリズム。日本語だけが持つ言語構造とそこから生まれる生理的快感。彼女はあらためて日本語に惚れ直したという。

そしてシリーズを追うにつれ、寅さんを取り巻

く人びとにロシア人と同じ体温を感じ始める。そもそもロシア人はその大半が代々質朴な農民だ。それぞれの農業共同体がいわば小宇宙で、その人間関係のなかの泣き笑いだけが日常とわいてい。柴又でも旅先でも、寅さんをめぐる騒動やその背景にある人情は、そのままロシアの庶民世界に重なる。まぎれもなくこのシリーズが、日本という遠い国を身近なものにしてくれたという。

1969年から26年、48作に及ぶ『男はつらいよ』は、ギネスブックに不朽の記録を残している。そもそも日本では、喜劇の芸術的評価が低い。しかし、人間性の本源に根ざした上質のユーモアは、異文化の壁をやすやすと越えてゆく。その本質を知り抜いている山田洋次監督は、何ともユニークな主人公を造形した。無邪気な悪ガキのまま、一向に成長しない永遠の少年。しかし、いつの間にか人びとをふしぎなカタルシスに包みこんでしまう。

高度成長からバブル崩壊に至る激動の26年間、盆と正月だけ飄然と現れた寅さんは、いわば天上の祖霊が姿を変えて、生者たちの鬱屈を解きほぐしていたのかもしれない。そして、そんな日本人古来の土俗的感性が、この超ロングシリーズを生んだのではないか。—————